アメリカ英語の特色 (Ⅷ)

近代イギリス英語とアメリカ英語

(Recent British and American English)

澤　田　照　徹

頁
第1章　アメリカ英語は近代イギリス英語の「上品」さを欠いているか… 112
第2章　近代イギリス英語の持つ「信望」(Prestige) …… 116
第3章　アメリカ英語の持つ保守的性格…… 117
第4章　アメリカ英語における語彙の変化…… 120
第5章　標準アメリカ英語とその統一性 (uniformity) …… 122
第6章　アメリカ英語とイギリス英語の相互不信感…… 125
　a.　イギリス英語に対するアメリカ人の抱く不信感…… 125
　b.　アメリカ英語に対するイギリス人の抱く不信感…… 127
第7章　イギリス英語の語彙に及ぼしたアメリカ英語の影響…… 128
第8章　米英における語の選択のちがい…… 135
第9章　アメリカ英語とイギリス英語における統語法と語形態上のちがい 142
第10章　慣用語法における米英のちがい…… 145
第11章　イギリス標準英語の純粋主義…… 153
参　考　文　献…… 156

第1章　アメリカ英語はイギリス英語の「上品さ」(elegance) を欠いているか

アメリカ人によって話される英語をアメリカ英語（"The American Language"）と呼ぶ名称は H. L. Mencken (1880-1956, 米国編集家, 風刺家) が使用した先例はあるが, 誤った呼び名であるという説がある。その説によれば, そのように呼ぶことは, 丁度メキシコ人によって話されるスペイン語をメキシコ語 ("The Mexican Language") と呼ぶのが誤りであるのと同じであると。恐らくヨーロッパ大陸にいる教育ある人々はこのことが事実であることに気付いているであろうが, 然し一般人は彼等が小学校時代に教えられた英語の話し方と, 「アメリカ英語」の話し方との間の違いを意識し過ぎているために, その相異を丁度アイスランド語とノルウェー語との相異, 或いはスエーデン語とデンマーク語との相異にも匹敵し, 恰かも別語である程に見做しているようである。このことはジャクスンヴィル (Jacksonville, アメリカマサチュセッツ州の町) にあるフロリダ・タイムズ共同通信社の通信種目 (item) (1957年10月4日) によれば, 西ドイツからの短波放送は, フランス語, スペイン語, ポルトガル語, 英語そして「アメリカ英語」("Americanisch") に分けて, そのドイツ語講座の海外放送をやっている, などによっても伺がえる。

英国人を含めてヨーロッパ人は, アメリカ人の使う英語は「今日行なわれている標準的イギリス英語」(current Standard British English)の腐敗・堕落した一変形 (corrupt and degraded variety) だと考えたがっているようである。イザベル・クウィンリ (Isabel Quinly) という或る女性映画批評家が, 映画 Ben Hur について批評を行ない,「Ben Hur の演出者は狡猾にも, ローマ人の役をする俳優には英語 (English) を喋らせ, 他の人種の役をする俳優にはアメリカ語 (American) を喋らせている ("Romans speak English, the rest speak American")」という批判を1959年12月8日号のスペイクテイタ誌 (the Spectator, 1828年創刊, 英国の文芸評論週刊誌) に寄せている。アメリカ英語に対する演出

者の評価はこうである。今日のイギリス標準英語は，少なくとも17世紀初期以来変化しておらず，それ故に「純粋な」（“pure”）言葉であり，他方丁度その当時北米大陸に移住した英国人は母国の土地では何らかの理由で暮しを立てていけない劣等種の英国人でそのような人間の言葉がアメリカ人の言葉となったものだからであると。

そのようにアメリカ英語を考える考え方は事実に直面すれば霧散してしまう考えではあるが，しかしその考え方は，アメリカ英語を劣等視する偏見を武装する利き目はあろう。若しアメリカ人がこのような偏見を大目に見てやる度量を持つとすれば問題は起らないだろうから。

アメリカ英語が，現代標準英語の堕落した一変形であるということを認めることは痛々しい事ではあるが，そう言われるままに，ひとまず当時のアメリカ人が辿った生活史を眺めてみよう。

初期のアメリカ人の持った歴史は，文明化したヨーロッパ人の観点からすれば決して光り輝く歴史ではなかった。たといアメリカ原産のヒカリ古木（Old Hickories《強靱なスキー材となる》）や，正直なエイブ達（Honest Abes）やデイヴィド・クロケット（David Crocket 1786-1863, 米国西部開拓者，政治家）等々に対するヨーロッパ人の尊敬心はあったであろうにしても，である。アメリカ史の初期の人口の大部分を構成していたと思われる人々は頑固で勤勉で，簡素生活に甘んじ，讃美歌を大声で歌っていた男や女どもで彼等のどこを探しても愛らしい美しいものは見出せなかったであろう。無慈悲とまで言える環境に抗して生き残るために苦闘を続けねばならなかった人間どもは，当然のことながら，文明の恩恵などに心をかかわる余裕があろう筈もなかった。注目すべきは，彼等の多くは，そして彼等の子孫達もまた，彼等がヨーロッパに残した遺産よりは，素朴な丸太小屋の新大陸での生活を愛したし，必然的に，いわゆる「アメリカの夢」（‘American dream’）なる生活道徳を作り上げた。アメリカ人が自らも誇りにしている「アメリカ的生活様式」（‘American way of life’）なるものはこうして出来上ったものではあるが，それがあるからアメリカ人は，そしてアメリカ人の話す英語は，ヨーロッパ人から高い評価

を受けてよいということには結び付かない。とは言ってもアメリカ人は自分達を，自分達の言葉を卑下し過ぎてはいけない。というのはヨーロッパの人間ども（European man）でも，アメリカ人が自分達の文明とは呼んではいるが大して愛好していない，人好きのしない幾つものアメリカ的特長，例えば福音伝道（evangelism）とか，からだに密着したパンツを穿いたカウボイとか，コーラ飲料とか，ロクンロール(rock-'n'-roll，強いアクセントと簡単な繰返し形式の音楽 rock-and-roll の短縮形)のようなものを，街頭で貪ぼるように採り用いていることは否定できない事実であるから。

そうは言っても次のことは依然として残ったままである。教養あるヨーロッパ人の大部分（most cultured Europeans）は，アメリカ英語（American English）に対して，それ程大きい尊敬心を持っていない。彼等は現代のアメリカ人の生活様式の楽しそうな面を紹介した宣伝広告文のアメリカ版を見て畏敬の念を起すかも知れないが，然し自分ではそのようなアメリカ英語を用いようとはしないであろうし，まして今日学校で教えられているイギリス標準英語の代りにそれを用いようとはしないであろう。イギリス英語（British speech）は遙かに高い信望（prestige）を依然として持ち続けており，イギリス人自らを始めとし，ヨーロッパ大陸にいるヨーロッパ人で，イギリス英語以外の変形英語を話したいと思う者は殆んどないし，またそれを話す傾向にある者も殆んどないと言えるであろう。英語の学位を採ろうとする一ドイツ人の研究者がトマス・パイルズ（Thomas Pyles）に，かつて率直な言葉で，アメリカ英語は「上品さ」(Eleganz) を欠いていると語ったので，パイルズは早速，当時アメリカで高い公的地位についている人々の用いたアメリカ英語を，イギリスで同様に高い公的地位にある人々の用いるイギリス英語とを相互に比べてみて成る程と思ったと，彼の「英語の起源と発達」（The Origin and Development of the English Language. 1965, p. 219）で述べている。

この辺に関してパイルズの所論をもっと辿ってみよう。

確かにアメリカ人のやる談話は大抵「上品さ」というこの素質を欠いていると思える。この素質は最も非民主的な素質ではあるが，教養あるヨー

ロッパ人にとっては今日なお重要なものだと思われている。アメリカ社会のような階級の区別のない（classless）社会においては，「上品さ」というものは，無階級無区別という言葉の単に原理的意味においてさえ，繁昌する筈はない。「上品さ」（'elegance'）という言葉そのものさえ人の物笑いになる性質のものである。旧世界においてはこれに反し，「言葉の標準」（standard of speech）なるものの大部分は，もともと特権を持った有閑階級の人士の使用法から発生したもので，それはその後学問のある人々がそれを真似て用いた語法である。

アメリカ人は，彼等の作っている社会の中にはそのような特権階級（caste）は存在しないと考えることを誇りとし，荒仕事で手の皮が硬直したヤボな田舎者でも，適当な注告に従いさえすれば貴顕の中に同席してもよい仕組みを持った社会の中で暮している。

上品さというものは教え込まれるべきものでなく，また説き聞かせられて出来る素質でもない。たといそれが言語の望ましい特長の一つであると考えられるにせよ，なにびとも，上品さの基準となるものがこれであると指摘出来る者はないであろう。事実それは例えば「行儀のよいゆとり」（'wellbred ease'）とか，「うっかり出した上品さ」（careless elegance）といった表現が示すような寧ろ偶然的な素質に過ぎない。それは民主主義が全く必要としない「無為の楽しみ」（dolce far niente〔dɔ́ːtʃe faːr njénte〕，《イタリヤ語》lit：（it is）sweet to do nothing）の所産である。それは「良い文法」（'good grammar'）と呼ばれる「鍛え抜かれた正確さ」（the tortured precision）とは凡そ無縁のものである。「良い文法」というものは，上品さというものとは異って，アメリカ人の国民的理想であったし，今日でも万人が修得し得るところのものである。上品さというものをアメリカ英語の中へ持ち込む必要は余りないであろうし，それが無いことをけなす必要もない。また上品さというような識別しにくい素質を定義付けする必要もないであろう。それは「音調」（articulation）や，「抑揚」（intonation）の問題が人生に対する一つの態度であると全く同一の一つの態度である。更にそれは語法の問題であって，言語に先天的

に内在する素質ではない。無味乾燥な古典ラテン語 (Classical Latin) を，だらしなく話す連中が過去にはいた事は事実であり，またホッテントット語 (Hottentot) を上品に話す連中も少しはいたであろう。

ここでは，イギリス英語にせよアメリカ英語にせよ，言語というものに「上品さ」なるものがあるか無いかを言おうとしているのではない。我々が言いたいのは，イギリス英語はアメリカ英語に比し，より大きい信望のある言語であることを認めざるを得ないし，それがどうゆう理由から来るのかをひとわたり眺める必要があろうということである。

第2章　現代イギリス英語の持つ「信望」

(The Prestige of the Modern British Standard)

イギリス民族は，ロンドンを中心とする南部ブリテン島に住む教育あるオックスフォード，ケンブリッヂ大学人，教会人等の用いるイギリス英語の語法を基礎にして，少くとも18世紀の後半の時期以後に，一つの語法を拵らえ上げた。そしてその語法は，世界に跨がる大英帝国内に住む黒色皮膚の土着民族 (darker skinned natives) を，その後相当長期間に亘ってとまどわせることとなった。今日でもその語法は，少しは昔日の政治的霊験 (political efficacy) を失ないつつあるが，依然としてその信望を保っている。イギリスで教育を受けたアフリカの酋長達は，可成りの洗練さを持ってその語法を話すし，ヨーロッパ人がアメリカ英語を軽蔑心をもって眺めているのと同じ程度に，彼等もまた或る程度の軽蔑心をもって眺めている。

勿論イギリス人自らが一斉にイギリス英語に好意的であるとは言えない例証もある。のぞいてみよう。スペクテイタ誌の1972年5月4日号の587頁に載った記事は，次のように述べている。Our School という名の記録映画をＢＢＣ放送が放送したのに対し誠に大袈裟な感謝の言葉が視聴者から多数寄せられたが，その映画は見ていると面白くてたまらない沢山の場面を含んだ誠に結構な，結び糸のはじを引張ると中からキャンディなどポンポンとはぢけて飛び出すパーティー用の一寸した贈物にも譬えれる映画であって，その一場面の中でスコットランド生れの一英語教師が，自分の英語授業の生徒達が，イギリス英語の豪華なアクセント (posh accents) にとりつかれていることにカンシャクを起した，とある。

この短評の寄稿者だった Clifford Hanley は更に続けて，

「この豪華なアクセントは，またわたしの気持をも困惑させるものだ。もし，（アメリカ合衆国ならぬ）ヨーロッパ合衆国というものが出来れば，厳粛ばったイギリスの偏屈老人達は，相手がフランス語の merde〔mɛrd〕（《人間或いは獣類の》糞（くそ））という文字を発音するその仕方から判断して，相手が正真正銘のフランス人（Right Type of Frenchman）か否かを判定する術を学びとらねばならないだろうか」と述べている。

この冗談の意味内容はと言えば，アメリカ人でさえも，時々は「豪華アクセント」を聞いてちっとばかりは心の平静を乱されるかも知れないが，然しそれによって感動して，標準イギリス英語は自分達が話すアメリカ英語より幾らか「良い英語」（"better" English）だと感ずることもありそうだ，ということである。純粋に言語学的な見地からすれば，こんなことは勿論ナンセンスではある。が然し，豪華アクセントを貯えた標準イギリス英語の影響力は，世界事情の中でイギリス帝国の影響力が将来失なわれる時期が来ると仮定しても，その時期よりずっと後迄，持続して行くであろう，ということを意味したものでもある。英語の研究者にとってはそのように予想することが安全な長期展望だと思われる。

第3章　アメリカ英語の保守的性格

(The Conservatism of American English)

如何なる形態を持つ言語でも，或る何等かの客観的基準に照らして非難されるということがあってはならない。ただそれを話す人間が非難されることは差支えない，ということを前置きして記述を進めよう。

大洋を横切ったという理由で言葉が変化を受けるというものではないので，アメリカ大陸に最初に入植した人々は彼等が母国で話したと全く同一の言葉を携さえて入植し，その語法をそのまま用い続けた。然し母国から海によって隔離された人々は，いろいろな生活様式においてそうであるように，言語的にも保守的（conservative）になる傾向があるのは何時の時代でも起っている。

そして今日アメリカにおいて話される英語は，現代のイギリス英語から

は消滅してしまった初期のイギリス英語の多数の特長を持ち続けている。それは丁度洋上の孤島で話されているアイスランド語 (Icelandic) が，他のスカンジナビヤ族言語からは既に消滅した昔のスカンジナビヤ語 (Scandinavian) の持っていた多数の特長を保持していると全く同じである。

従ってアメリカ英語をイギリス英語より劣っていると見做すことは，同時に近代初期の標準的イギリス英語を非難するのと同じである。何となればアメリカ革命 (the American Revolution, 1775-83) の時代には疑いもなく両国語の間には殆んど区別は無かったからである。例えば英国皇帝ヂョーヂ3世 (在位1760-1820) やコーンウォリス卿 (Lord Cornwallis, 1738-1805, 独立戦争の英軍指揮官) は，ヂョーヂ・ウォシントン (1732-99) や，ジョン・ハンコック (John Hancock, 1737-93, 独立宣言文の第一署名者でアメリカ下院議長) 等と全く同じ仕方で，ask, after, path, glass, dance 等の用語を発音していたということは根拠がありそうである。彼等はそれ等の語を発音するに，今日の圧倒的多数のアメリカ人が発音しているのと同じ発音をしていたようである。即ち上記各語の当時の発音はイギリス・アメリカとも区別がなかったし，aの綴字の音は〔æ〕,〔æ:〕また時には〔a〕であった。即ち〔æsk〕，〔áeftər〕，〔pæθ〕，〔glæs〕，〔dæns〕と発音していた。

〔注〕今日もアメリカ英語では，上記の語群及びその類語の綴字 a は，この発音で行なわれている。イギリス英語で後になってこれらの語を夫々〔a:sk〕，〔ɑ́:ftə〕，〔pɑ:θ〕，〔glɑ:s〕，〔dɑ:ns〕と発音するに至った。今日これらの語の綴字 a の発音がイギリス英語では〔ɑ:〕，アメリカ英語では依然として〔æ〕，〔æ:〕であることは重要なちがいのうちの一つをなしている。

母音の後の r (post-vocalic r) という綴字の発音についても，前述の綴字 a の発音の場合と同じ発音法がとられた。即ち当時は母音の後の r はイギリス，アメリカの区別なく〔r〕音で発音していたし，アメリカ英語では今日もそのまま〔r〕音をつけて発音しいる。イギリス英語でこの〔r〕を脱落して今日のようにサイレント r になったのは，これも独立革命以後に起った現象である。例えば letter, dinner, girl, rear, chair, short

などは〔létər〕,〔dínər〕,〔gə:rl〕,〔riər〕,〔tʃɛər〕,〔ʃɔ:rt〕というふうに当時は区別なく発音していた。今日のアメリカ英語がこの綴字 r が〔r〕音を保存していることは最も重要な特色の一つである。

〔注〕イギリスとアメリカにおけるこの綴字 r の発音の有無・様式については後章で詳記したい。

アメリカ英語の持つ特色だとされている他の特色もまた，アメリカ革命以前のイギリス英語の中に見出される。そしてあの有名なスウェーデンの言語学者エイラト・エクワル（Eilert Ekwall）が，アメリカ革命以後のアメリカ英語について，「アメリカ式発音は概してイギリス英語の発音と無縁な状態をなしており，その結果，アメリカ式発音は，標準イギリス英語がその後に経た発展的変化の分け前に預からず，革命時代までにアメリカ式発音が到達していた段階で停止したままである」という結論に到着したのも当然のことである（E. Ekwall: American and British Pronunciation, 1946, pp. 32-33）。エクワルの関心は，特に語の発音にあったのだが，彼の論評の主旨は辞書的語彙の多くのものにもまた当てはまる。例えば語の形態的（morphological）特長や，そして或る程度迄は声の抑揚（intonation）についても言えることである。

アメリカ英語が gotten という形態を今日も保持しているのは，たとい それが意識的保持ではないにしても，アメリカ英語の保守性の一例を示すものである。この形態は古い時代のイギリス英語において get の過去分詞として通常用いられたものであるが，今日の標準イギリス英語の中では，主として "ill-gotten gains"（「不正利得」）という慣用にしか生き残っていないが，アメリカ英語では可成り大手を振って通用しており，get が「所有する」という意味の時と，「…せざるを得ない」という意味に用いられた場合（下例）を除き，get の通常の過去分詞として生きている。

He hasn't got the nerve to do it.（彼にはそんなことをする勇気がない。）

He has got to do it.（彼はそれをしなければならない。）

アメリカ英語で fall が季節の「秋」の意味で今日なお生き残っており，

deck が「トランプカードのひと組」を今日なお意味しているのもまた，アメリカ英語の保守性を示している。

〔注〕 アメリカ英語の保守性については本論文の前の部分でその原因を追跡した。

第4章　アメリカ英語における語彙の変化

(Vocabulary Changes in American English)

アメリカ英語は，イギリス英語に今日まで生き残って用いられている英語の特色の或る部分を失った。それは語彙の面で著るしい。例えばイギリス英語の語彙 'waistcoat'（チョッキ）を失い，代りに 'vest'（《英》シャツ）を用いてチョッキを指し，'fortnight'（二週間）を失い，代りに two weeks を採用した。アメリカ人が必要としなかった多数の地形風土的（topographical）語彙例えば fen（《特にイングランド東部の》沼沢地），wold（《不毛の》高原），spinny（雑木林），copse（やぶ），dell（《山間の》谷間），heath（紫・白・ピンク色の吊鐘状の小さい花を着ける低木），moor（イングランド・スコットランドの低木の生えた高原）などを失い，その代りに，旧世界にある地形のどれにも似ていないアメリカの地形的特長を表示する語彙を強く必要とした。アメリカ人はそのような新事物を表わす語彙を持たない欠点を補なうために，1）イギリス英語の語彙を結合して，新しい結合語を作り出し，例えば backwoods（辺境の森林地），watergap（河流で出来た峡谷），underbrush（下生え，やぶ），2）イギリス英語の語彙をそのまま用いてそれに新しい意味を付加し，例えば creek（海の入江）に凡ての「小さい川の流れ」を付加し，3）外国語を採用していわば語彙的発明を行なった。例えばフランス語の pré（field）から prairie（《特に Mississippi 川の》大草原・大牧草地）を造語したり，canyon（深い峡谷；スペイン語の cañón《管》），mesa（台地《スペイン語》）などの新語を開発した。入植者は新大陸で始めて接した植物群や動物群を呼ぶ語彙の発明にもこれに似た語彙操作を行なった。例えばイギリスの駒鳥（the English robin）に幾分でも似た鳥を見た時には，たといその新しい鳥が駒鳥と同一の鳥でなくても単に robin と呼び，また彼

がかつて見たことのある動物とは全く似ていない動物を見た時には，インディアンの呼び名を借りてその動物を呼称した。例えば racoon（あらいぐま《樹上に棲み夜間に活動する熊に似た小動物》），woodchuck（モルモット）などはそれである。

アメリカ英語は，度々指摘してきたように，本質的には17世紀のイギリス英語から発展した1つの言語である。そしてアメリカ英語の持つ著しい特色のうちでイギリス英語まで跡づけることの出来ないような特色は，語彙に関するもの以外はその種類は多くはない。分析しておこう。アメリカ英語は上に示したように語彙に関しては，極めて進歩的な言語であり，語彙以外の面に関してはイギリス英語より遙かに保守的で入植当時のものを今日なお残しているといえる。

この点について観点を一寸拡げて付言しておこう。

現代ゲルマン諸語（Germanic Languages）のうちでアイスランド語（Icelandic）は，ゲルマン祖語たる原始ゲルマン語が語られた時代以来変化の最も小さい言語であるが，英語はそれに反し最大の変化を示した言語である。同じ英語の中でもアメリカ英語は，特に語彙に関して言えば生き生きとした精力の溢れ出た成長の著しい一方の流れを構成し，英語の前進運動の旗手の役を果してきたと言えるであろう。イギリス英語は言語のこの部面では，アメリカ英語の遙か後からその重たげな足を引きづってきたのが現実の歩みである。

〔注〕ゲルマン諸語はインド・ヨーロッパ語族（Ind-European Language Family）中の一大語派で，今日およそ4億の人々によって話されている。このうち英語は2億8千万，ドイツ語（German）は9千万，スウェーデン語（Swedish）は7百50万，デンマーク語（Danish）は4百50万，ノールウェー語（Norwegian）は3百40万，アイスランド語は18万，オランダ語（Dutch）は1千6百万の人々によって話されているという。

話しを元に戻そう。

進展しない以前の語彙部門を含めて，アメリカ英語の出発点となった英語は，当時イギリスにおいて行なわれていたいくつかの方言のうち，ロンドン地域の有識者の用いていた南部方言であったことは言う迄もない。17世紀のイギリス英語で1つの方言であったものがアメリカに持ち込まれ

て，アメリカ英語の特色となったようなものもあるが，そのような方言は入植者が入植以前から喋っていた方言で，アメリカで大きい影響力を持つものではなかった。文学的標準英語（a literary standard）は既に前の章で述べたように，この時代よりずっと以前の近代英語の初期に既にロンドン地区に起っていたし，それはイギリスで通用語（common speech）として行なわれていた様々な地域的な言語様式に大きな影響を既に与えていた。そしてこの様々な地域的な言語の様式は新世界に永住するために入植しようとしたイギリス人達の多くの者が用いていた談話でもあった。というのはそうゆう移住者達は出身をただせば無学の田舎者ではなくて，上流階級の中での低位の人士や，低い階級の中でも中位階級の人士で，何れも野心満々で勤勉な者達であったからである（中には教育のある例えば僧侶，弁護士，或いは若干の貴族の子弟も混っていた)。

初期のアメリカの社会集団は，そのどの集団にも教養人の核というものがあったということはありそうな事であるし，そのような事実から判断して，アメリカ英語が今日の標準イギリス英語に類似しており，それ以外の他の様式を持つイギリス英語（例えばイギリス北部英語）に似ていない理由が納得出来る。

第5章　標準アメリカ英語とその統一性

(the Sandard American English and its Uniformity)

広くアメリカで用いられている英語には，三つの主要な地域的形態がある。北部型（Northern regional type (，中部型（Midland regional type），南部型（Southern regional type）の三つであるが，実は西部を旅してみると，これら三つの型の非常に多数の混合型（blendings）にも出会うし，また大西洋岸地域には多数の下位言語型態（subtypes)，例えばニューヨーク地域，ボストン地域，南に下ってチャールズトン・サヴァナ地域の言語型もある。然しこれら大小の地域的言語の型態に通じて言えることは，何れも前記の17世紀の標準イギリス英語（今日のイギリス英語より文法的に遙かに自由な構成を持っていた）を基礎にし，それに地域

的修正を加えて出来上ったものであるということである。

ボストンは今日では，アメリカ文化の中枢としてのその初期の優越的地位を失った。若しボストンがその地位を持続していたとすれば，アメリカはボストン方言を基礎とした地理的な，またそれ故に終局的には特権階級者的な標準アメリカ英語を持っていたであろうと思われる。事態がこうであるのでアメリカ人は少しも社会的非難を受けることなしに，何れの型の方言でも，またその修正型でも用いてよいし，彼が教育ある人間だということが彼の物腰しから判断してもらえる限り，彼の喋る話題から判断してもらえる限り，彼は教育ある人間であり，彼の談話は検閲を通過する。たとい彼の談話の中に，「鋭い中部型 r の音」（“harsh Midwestern r”）や，「南部的のろい話し振り」（“lazy Southern drawl”）が時々は混っていても，である。国中の何処へ行っても彼は社会的に受け容れられる。イギリス英語，フランス語，イタリヤ語，スペイン語，ドイツ語，或いはその他のヨーロッパの諸言語に比較して，アメリカ人が相互に用いる談話は十分に同質のものであり，国中の何処へ行っても理解される。たまには眉をしかめた疑いを聞手から受けるかも知れないが，それは聞手の地域的偏見からのものであるに過ぎない。サウスカロライナとヂョージァ州の海岸地帯に居住し，幾世代もに亘って文化的に隔離の状態のままで今日までその地に留まっている約10万人の黒人が話しているグラ語（Gullah，この方言にはアフリカニズムがあるといわれる）の例外があることは止むを得ない。テクサス州の或る油田王はボストン市上流住宅区域に住むボストン市民なのだが少々変った話し方をし，またヴァージニア州の一地主はもう少し別な話し方をするが，彼等が教育ある人間らしく話す限り「立派な」（“good”）アメリカ英語を話していることに変りはない。自分の話すアメリカ英語の音声に注意している限りにおいて，シカゴ市民は自分の発音する綴字 r の音を誇りにして差支えないのは，丁度チャールズトンの市民が綴字 r の音を脱落するのを誇っていいのに等しい。r の音のどちらの扱い方も通常は優劣があるとは見做されていない。両者は単に扱い方が幾分ちがっていると思われているだけであり，そして両者の間に扱い方のちがい

はあるが，そのちがいは必ずしも人の注意を呼んでいるものではない。

アメリカ英語の方言というものも，それは広地域的（regional）なもの，若しくは個人的な話し方のちがいであって，或る特定の地位の人々の間とか或いは狭い地域の内側でのみ行なわれている語法のちがいというものではない。それは丁度ドイツ語における北部ドイツ語と南部ドイツ語とのちがい，北部フランス語と南部フランス語とのちがいなどが持つ広地域的なちがいに似た程度のちがいでしかない。

翻ってイギリス英語の場合には，地域のちがいにより話される言葉のちがいは大きく，度外れに口調色調を高められたオックスフォード方言（Oxford dialect）から，聞いても仲々理解しにくい田舎の方言（country dialects），はてはロンドン East End 地区下層住民の話す所謂ロンドンなまり（'plate'〔plait〕，'house'〔æus〕のような発音法）のコクニー（cockney）に至るまで様々である。従って当の英国人でも教育を受けた者でなければ国内の他の部分に住む人々の話しを理解出来ない場合もある。アメリカでは国民は多かれ少なかれ教育を受けており，同じ種類の英語を学び，かつ話す。アメリカでは作家・教師を含めて重要な地位にある人々は殆んど一様に低い身分から身を起し同じ言葉を話し使ってきた人々である。それ故にアメリカ合衆国の普通の言語(average language）は英国（England）の普通の言語より高い地位に達しており（rank higher），それ故に「もっとよい英語」（"Better English"）を主唱する人々でも，アメリカ英語が既にそこ迄成長していることを認めて，イギリス人自らもアメリカ英語の獲得した「同一性」（uniformity）には驚きの目を以て眺めている。

「統一性」を持ったこの英語はアメリカで話される英語であるばかりでなく，英語を話すカナダ人の大部分の英語と同じものであり，ラテンアメリカ地域，太平洋諸島，中国，日本で英語を話す人々の大部分の話す英語と同じものであり，標準アメリカ英語と呼ばれる資格のある英語である。

第6章　アメリカ英語とイギリス英語の相互的不信感

(A Case of Mutual Intolerance)

a.　イギリス英語に対するアメリカ人の抱く不信感

大体1930年以降になってアメリカ人はイギリス英語を受け容れるのに寛大な態度を示すようになった。イギリス標準英語の持つ最大級に豪華で「ハデな」(posh) いろいろな発音法でさえ，アメリカ人は次第に不快に思わなくなってきた。当のイギリス人でありながら，それが親譲りの発音法であるために，そのような発音の特別な訓練を受けなかったか，或いはそのように発音する術を修得出来なかったか，或いはそれを習うことを喜ばなかったか等々の理由で，母国語の持つ「ハデな」アクセント (posh accents) に反撥する若い世代のイギリス人達，例えばいわゆる「怒れる若者達」(angry young men, 1950年代の末ごろ既成社会制度に対する怒りの文学を書いた若い作家・評論家グループ；彼等の反抗心を最もよく示す作品としては，ロンドンで大ヒットしたオズボン《J. Osborne, 劇作家・俳優》作の戯曲「怒りをこめてふりかえれ」《Look Back in Anger, 1956 がある》が抱く不信感に比べても，アメリカ人の抱く不信感は小さいものとなっているのが現状であると言える。

それどころではない。アメリカ人は，イギリス英語の「豪華絢爛たる種々相」(posh variety) に対し，ラヂオ・映画・テレビなどによって寧ろ十分に親しみを感じており，アメリカ人の大部分は今日ではイギリス英語の発音法を，仕事の能率を高めるのに可成り役立つものと受取っている。

とはいえ，アメリカ人の持つ不信感が薄らぐまでの過程で経てきた反証の例も掲げることが学問的には必要であろうと思われる。

英国の詩人マスュ・アーノルド (Mathew Arnold, 1822-88) が，1844年にアメリカを訪れた時，シカゴでは決して愛される人物とはならなかった。その町で彼は，「目鼻立ちが厳しく，態度が横柄で，髪を真中で五五に分けて両側へ垂れ下げ，単眼メガネをかけ，衣服もからだに付いてい

ない」という悪評を受けた（アメリカの歴史家 Allan Nevins, 1890-1971; 「アメリカ社会史」, American Social History, 1923, p. 501）と言われる。にも拘らず「彼のこうした非アメリカ人的欠陥も，彼の発音のアクセントが聴衆を煙に巻く式のものでなかったとしたら大目に見てもらえたであろう」と彼を斡旋したアメリカ人も述べていたと言われるが，ありそうなことである。彼の講演に対する別の批評も中傷的なもので，アーノルドは彼の時代の普通のイギリス英語のうちでも「最高級に音の高低を付けた」（"toniest"）発音型を話したと述べるだけであった。事実彼の言葉は明らかに posh accent を喋った。然しニューヨーク人は彼をもっと慇懃に迎えた。今日ではエリザベス2世女王（1926-　）や，第2次大戦時の英国宰相ウィンストン・チャーチル（Sir Winston Churchill 1874-1965），エィボン卿（Lord Avon, 1897-　，Anthony Eden としてアメリカ人に知られている英国宰相《在任1955-57》）の演説については再びこのような批判の言葉が出るとは今日では思えない。まして騎士役を演ずる映画俳優の アレック・ギニス（Alec Guinness）や，ヂョン・ギールグッド（John Gielgud, 1904-　，英国の俳優），ローレンス・オリビヤ（Laurence Olivier, 1907-　，英国の俳優演出家），マイケル・レッドグレィヴ（Michael Redgrave），ラルフ・リチャードスン（Ralph Richardson）などが用いるイギリス英語はアメリカ人の批判の対象とはならないであろう。彼等は何れも合衆国に可成りの数の門下俳優を持っているからである。

〔注〕 俳優を場面に登場させることは公平なことではないかも知れない。何故ならば古い流派のアメリカの俳優連は一種の「人工舞台言語」(artificial stage speech を喋るように訓練されていたからである。たといその舞台言語が，決してイギリス英語そのものではないにしても，多くの点でイギリス英語の特色を持っていたから。

とは言うものの，アメリカ人は，自分達の話す英語と，イギリス英語との間の「相異」（'differences'）を余り理解していないのが実情だと言える。従ってアメリカ人はイギリス英語によって影響されることは少ない。彼等の多くはイギリスを訪れていないし，イギリス英語が話されるのを聞

いたことの無い者も多い。アメリカに移住する者の大部分は移住後間もなくヤンキー語法を身に着け，アメリカ生れのアメリカ人と殆んど，または全然違わなくなる。場合によってはニューイングランドの住民とさえ思い違いされる。学校教育でもイギリス英語の語法と，アメリカ英語の語法の違いを違いだとして教えるようなことも行なっていない。

変形語法が出てくると，それらの違いも，一方は正しい（correct），他方を正しくない（in-correct）という札を貼るか，乃至は一方は「その方がよい」（'better'）であり，他方は「それ程よくない」（'not so good'）という札を貼るような取扱い方にしてしまっているのが一般的である。それ故にイギリス英語の要素は屢々学校教育では，推薦はするが，推薦の仕方も，イギリス式ですよという仕方でなく，この方が正確度が高いという仕方がとられている。また両言語の相異点も極めて控え目にしか取り上げられないし，それも通常は書かれた英語の場合だけである。両言語の相異点は，況んや話し言葉の中へは仲々入って来ないし，来たにしても，イギリス英語語法は専ら喋り手が気取って喋っているに過ぎないのだと受取られているのが実情である。

b.　アメリカ英語に対するイギリス人の抱く不信感

イギリス人はこれに反し，アメリカ英語を受け入れる寛容さを可成り欠いている。というのはイギリス人の間には，既に触れたように，アメリカ英語をイギリス英語の堕落した一つの変形だと見做し，アメリカ英語は早い時代のイギリス英語の一つの独立した発展形態であるとは見做さない傾向があるからである。この点トマス・パイルズ（Thomas Pyles，フロリダ大学教授）が英国滞在中の経験談を次のように述べている。私が隣人の一婦人と交わした談話の中で「ブリテゥン英語」（'British English'）とう言葉を不用意に口から出した時，彼女は彼女の使う最高級の笛の音のよいうな上流社交人の音調で，「ええ，ブリテゥン英語でない英語ってあるんですか？」と私に尋ね返した。それに対し私は答えようと思えば至極簡単に答えることは出来たのですが，すぐには答えなかった。それというの

は，言語感情というものは，すぐに昂じてくる性質のものだから，言語の問答を社交的話題にすることは不適当だと思ったからだ，と。アメリカ英語のほか，オーストラリヤ英語，カナダ英語，南アフリカ英語，インディアン英語等々があり，その何れの英語にせよ，正に英国人が偶々何の理由もなく母国語として話している英語が正当な英語であるのと同程度に，正当な英語である。故ギルバート・ハーディング (Gilbert Harding) が，或るアメリカのテレビ番組に出演していた席で，彼の口調の「イギリス的アクセント」("English accent") に誰かが言及した時，不機嫌そうな顔付をしてではあったが，聞き違いをした振りをして，「イギリス的アクセントなんて私の言葉にはありませんよ——わたしはイギリス人ですもの」と応えたという話もある。イギリス人が母国語を話す際その最も明瞭な発音法を用いることは誠に当然であり，その発音法式を他から非難されることを不快に感ずるのも又当然である。イギリス人にとっては，語彙の発音をする際，発音器官の活動の弛い動きから出る曖昧な発音を持つアメリカ英語で満足が出来ないのは同様に当然なことであろう。

第7章　イギリス英語の語彙に及ぼしたアメリカ英語の影響
(American Infiltration of the British Word Stock)

近代世界史の時代に入って，英語を話す人間集団のうちで，アメリカ人集団が最も大きな経済的・技術工学的そして多分政治的影響力を獲得するに至ったという理由で，イギリス人集団やその他の英語を話す民族集団が，却ってアメリカ人を快く思わず，同様な反撥心から，アメリカ人が話している言語に対しても或る程度の抑圧的な態度を採ったということは不自然なことではないであろう。事実はこうであった。イギリス人は少くとも1735年以来はアメリカ人の話す英語に対してそのような態度をとった。このことは1735年というその年にフランシス・ムア (Francis Moore) という一英国人は，イギリスの読者に向けて，サヴァナ (Savannah) という当時まだ生れたばかりの赤ん坊に過ぎなかったアメリカの町について書いた紀行文の中で次のように述べていることでも分る。「その町は一つの

丘の斜面に立っており，その丘というのは川の堤防で断崖状の嶮しい土手である。そしてその土手の名前として彼等アメリカ人達は野蛮な英語（barbarous English）の‘bluff’（川・湖・海に面する巾広い絶壁，横浜，神戸などの「山の手」）という用語を用いている」と。アメリカ英語の研究者として最高の名声を持った H. L. Mencken（1880-1956，前出）は彼の The American Language（1918）の第一章の中で，アメリカ英語に対するイギリス人のとった態度を，彼の得意とする冗談を混えて詳述している（後記）。

アメリカ英語に対するイギリス人の態度はそのようであったにも拘らず，また当時のイギリス人にとっては期待に反することではあったかも知れないが，事態は正にその逆の方向へと進んでいたと言える。それはこうである。

イギリス英語の語彙（vocabulary）に関する限りでは，そしてまた言語のことを考える場合には大抵の人々は，言語なるものを語彙の種目という点から考えるが，イギリス英語の中へは寧ろ休むことなくアメリカ語法が流入し続けているというのが事実であって，イギリスの文筆家達は屢々その事実を非難している。

スィリル・レイ（Cyril Ray）は，彼が寄稿し続けているロンドンのスペクティタ誌（前出）の1962年2月9日号の「解説」（“Postscript”）欄で，特に大きくこの問題を取り上げている。彼は「大戦以来の英語語法の絶え間なきアメリカ化」（原文のまま）（‘the continuing Americanisation〔sic〕of English usage since the war’）という非難的言葉を何回も用い，次のような事例を掲げて悲憤慷慨の情を吐露している。レイの気に食わない事実は，英国の小説家イーアン・フレミング（Ian Fleming）が書いた一短編小説の中で，イギリスの一「高級」官吏（“a very senior” official《アメリカ語法》）が（国家の）機密諜報員をしている小説の主人公に向って語ったセリフの中で，『おい！君には「外務省チップ（心付）」（“FO pouch”）がでるかも知れんよ』と，喋った事である。

〔注〕 FO＝Foreign Office；pouch 1. 袋，行嚢　2.《米俗》心附＝tip）

レイは更に続けて言う，「わたしは高級だろうが，そうでなかろうが，長年に亘って英国外交官の慣用語法であった "FO pouch"（外交官用手提カバン」）という語を使って「手提」（"the bag"）以外の物品を指した外務省の役人に出会ったことは無い。'pouch' は全くのアメリカ語であるから，英国人なら 'the bag' を用いるべきだ」と。国際的問題に関してアメリカが今日では優越的地位を獲得している結果として，アメリカ用語の Top Secret（「極秘事項」）が単に従来は Secret という語しか用いなかった英国においても今日では用いられており，またアメリカ用語の high-ranking officer（「高級士官」；第2次大戦以前には見たことのなかった汚くって無駄なアメリカ的新造語）が英国に入ってきて，従来は 'general officer'（陸軍将官），'flag officer'（艦隊司令官），'field officer'（陸軍佐官）という言葉で表わしていた役職を指すのに用いるようになったし，或いはもう少し意味の巾を拡げて，従来の 'senior officer'（「先任将校」）まで表わすようになっている。同様にまた，アメリカ新造語の 'career diplomat'（「職業外交官，はえぬきの外交官」）や，見て「ゾッとするような混合語」（"horrid hybrid"）の career diplomatist を採用して，従来英語で用いていた professional diplomatist（「職業外交官」）を打ち棄ててしまった。

〔注〕 レイは同じスペクテイター誌の1960年7月8日号の「解説」欄に寄稿した評論の p. 78 で次のように述べている。オクスフォード大学出版社とケムブリッヂ大学出版社共編の New Testament（新訳聖書，1961）は，the Authorized Version（欽定訳聖書，1611）が 'chief captains'（「司令官」）という語を用いているところの 35段23行に，'highranking officers' を用いていることは興味あることであると。また英国の一評論家は 'highranking officer' の代りにいっそのこと，'topbrass'（《米俗》《陸空軍の》高級将校連」）を用いたらどうかと言っているのも同じ嘆きからであろう。

レイ自身の職業が，たとい新聞記者であったにしても，それは彼自身アメリカ英語を用いるという堕落を冒しているという非難を外らし得る根拠にはならない。何故ならば，彼は文体に対し非常に気を配っている一英字新聞の中で，イギリス英語なら 'news agencies'（「通信社」）というべきなのに，アメリカ用語の 'wire services' を用いているからである。

英国におけるアメリカ用語の流行を嘆くレイの嘆きをもう少し続けよう。英国人は英国式献立でいう chips（《薄切り》ポテトチップ）を指すのに，わざわざ長たらしい不明瞭なアメリカ名の French Fried(＝French fried potatoes，細長ポテトフライ）を用いているが，淋しいことだと。またイギリス英語の純粋性の擁護者である彼は，「あの厳粛な英語を用いることで知られるタイムズ新聞（Jimes）が，'adolescents'（「青年男女」）の代りに，アメリカ語の'teenagers'（「十代の青年」）をその社説欄(《英》"leader-page"，《米》"editorial-page"）にまで使用することを好んでいると嘆き，また同じ新聞が完全によい英語の用語である'centenary'(「百年祭」）の代りに，もう一つの不必要な「米国風の言葉遣い」（Americanism）の the American Civil War 'centennial' のように用いていると嘆いている。

米国風の言葉遣い，それは合衆国特有の語彙や句であるが，と言っても実際はそれらは早い時代の英語に誕生したもののようであるが，事実として非常な数で，イギリス英語の中へ流れ込んでいる。その流入は，まだ発声映画，ラヂオ，テレビ等の情報伝達手段を人々が夢想だにしなかった随分古い時期から始まっていた。けれども第2次大戦はこの流入に拍車をかけ，それがイギリス英語の腐敗堕落の最大原因であるとレイは見做している。

「史的原理に基づくアメリカ英語辞典」（'Dictionary of American English on Historical Principles'，4巻物，1938-44）の編輯者ウィリアム・クレイギ（Sir William Craigie，1867-1957，英国の言語学者，辞書編輯家）は1927年に次のように指摘していた。彼の言葉に従えばこうである。

「約2世紀に亘って新語彙と新意味とが大西洋を横切ったのは規則的に西に向ってであった。19世紀に入ると共に反対方向の流れが始まった。そしてその流れは多数の流木を乗せてブリテゥン島の岸辺に迄運んだ。そしてその流木はその海岸で拾い揚げられ言語機構の中へ編入された」。そしてイギリス英語の中へ 'backwood'（辺境の森林地），'blizard'（大吹雪），

'prairie'（《ミシシッピー川地帯の》大平原），'swamp'（沼地），'bunkum'（《口語》《選挙民の》人気取り《演説》；bunk《米俗》だ法螺，bunkum の短縮形），'caucus'（《米》《政党の》幹部会《政策・候補者等を決定する》），'belittle'（見くびる《この語は最初トマス・ヂェファスンが「ヴァージニア州についての覚え書き」《1787》の中で使用した語で，それを見て衝撃を受けた英国の註解者達が「お願いだから我々の母国の命を助け給え」と叫んだという），'cloudburst'（どしゃ降り）や，その他新大陸の風土に馴化してから既に久しく経っていた多数の語彙をイギリス英語の中へ入れてその肉と化することとなった。

近年に及んでは多数のアメリカ語法がイギリス英語の慣用の中へ入ってきた。例えば 'cafeteria'（《米》セルフサービス簡易食堂），'electrocute'（電気死刑に処する），'highbrow'（教養の高い知識人，最近では egg-head，知識人），'lowbrow'（《口語》教養知性の低い人），'cocktail'（《食前に出す》冷やした果物ジュース），'filling station'（《米》service station ともいう，《自動車の》給油所），'fan'（＝'sports devotee'，狂信者；fan < fanatic の縮少形）や，そして勿論のことだが至る所に姿を表わす O.K. 等々アメリカニズムのホンの一握りの例にしか過ぎない。アメリカ英語の 'radio' は実際上イギリス英語の 'wireless' の地位を奪ったし，同様に 'TV' も明らかに，言うなれば幾分か育児室向きの 'telly'（《英俗》テレビ）をイギリスから駆逐してしまった。'O.K.' はどちかと言えば今日では，それが誕生したアメリカにおいてよりはイギリスでの方がより屢々用いられているし，また細部の正確さを示すための法律的書類の中というような全く公式な情況の中においても起り得る語となっている。

上に掲げたアメリカ用語や，ここに掲げる余白の無かった他の多くの用語が，なんの抵抗も無しに，イギリス英語の中へ滑り込んだが，それらがアメリカ起原の語だということも気付かれてはいない。僅かに気付いている者があるとすれば少数のコチコチの外皮で身を包んだ年配の話し手（'a few crusted older-generation speakers'）位のものである。それ等の

語彙は，イギリス人によって用いられているので既に「英語」（'English'）であるということが現存している。並等のイギリス人にそうではないと言い聞かせようとしたアメリカ人があるとしてもそれは徒労に終ることは明らかである。

ブライアン・フォスター（Brian Foster）という名のほんの並等でしかない或る英国人は，知ったか振って，「標準英語の慣用語法に及ぼしたアメリカ英語慣用語句の巨大な起動力」（"enormous impact of American idiom on the standard British usage"）について一文を書いて，「奇妙な逆説ではあるが言語の専門家でさえもアメリカ英語の慣用語句の影響を気付いている人々は数少ないし，また別の人々は，影響力など及ぼしたということを現実に否定している」と述べている。この点に関して言えばフォスターは或る程度迄事実を述べていると言える。例えばエリック・パートリッヂ(Eric Partridge, 1894-　，英国の辞書編輯家)でさえも，「イギリス英語のアメリカ化はあるにしても，主としてそれは隠語（cant），俗語（slang），口語（colloquialism）と，そして標語（catch-phrases）などに影響した位であって，実際上は1900年以降のイギリス英語とアメリカ英語との中では影響は驚く程小さい」（'British and American English Since 1900', New York, 1951, p. 180）と書いている。

フォスターは，彼の同じ論文「標準英語に及ぼした最近のアメリカ英語の影響」("Recent American Influence on Standard English", Anglia 誌（1956. 73章, pp. 328-57）の中に次のような用語も掲げて，標準イギリス英語の中にその地位を確立しているものとして組み入れている。'show business'（《演劇・映画・テレビなど》演芸業），'to build up'（《新製品などを発売前に》宣伝する），'of all time'（空前絶後の；例えば the greatest film of all time に見られるようにアメリカ人の大袈裟な言い方を好む性質の代表例と最初は見做された語法），'star'（人気芸能人），'disk jockey'（軽い話題・広告放送などを間に挟んだレコード音楽の番組を担当するアナウンサー；D. T. と略す；英国では disc- と綴る方が多い），'bobby soxer'（《口語》思春期の少女，ティーン・エイジャー），

'natural'（キラキラ光ってはいるが訓練未熟の芸能人），'to put…over'（《口語》《演劇・映画などを》成功させる），'to get (something) across'（《口語》《芝居などを》成功させる），'stooge'（《口語》道化役にからかわれる相手役），'double talk'（人を煙に巻く出鱈目な言葉，たわごと），そして 'ballyhoo'（《口語》騒々しい大法螺広告）など。これらの慣用語句は，現代アメリカでは恐ろしく重要な芸能世界の用語から来たものが多い。そして 'of-all-time' 以外は文学用語とは余り縁が無い。然し次に掲げるようなアメリカニズムは，聞く者の国籍上の結び付きがどうであろうと，文体というものに対して純化され洗練された言語感覚を持っている聞き手にとっては，不快な念を起させるものであるかも知れないが，それにも拘わらず，大西洋の両岸に住む全く著名な文筆家達の作品の中に表われるし，また「おえらがた」(V.I.P., very important person の略，大戦中アメリカ海軍兵士仲間の用語）の公式な発言の中にも表われる語法である。'way of life'（もとは，'American way of life' のように国民感情を担った慣用句であったものが，今では単に 'life' 生計・生活という単純な意味しか持っていない），'alibi'（アリバイ，事情が…の弁解になる），'breakdown'（分解・分析），'blurb'（《口語》《新刊書の》自賛的誇大広告《本のカバーに印刷する》），'quit'（《口語》職をよす；前には古語と見做されていた用語），'maybe'（《アメリカ用法に準拠して》恐らく《もと古語》），'crash'（衝突する），'allergy'〔ǽlərdʒi〕（《俗》反感，けぎらい），'angle'（観点），'sales-resistance'（《俗》購買〔註文〕拒否；不人気），'to slip up'（《米話》誤り，見落し），'to stand up to'（に《勇ましく》立ち向かう），'to go back on'（《約束などを》取消す；《人を》裏切る），'know how'（《もと米》実際的知識；《製造などの》技術；こつ）などの語法が示されているが，これ等は今日では標準的イギリス英語として全く定着した。'fortnight'（連続した2週間）という用語は，その語を少しでも知っているアメリカ人ならその殆んどが，それは古くさいイギリス式慣用語だとして受取る語であって，若い世代のイギリスの青年達の口からも殆んど出てこず，却ってアメリカ英語の 'two weeks' が圧倒的に用いら

れている。

〔注〕 fortnight という語の完全な消滅は，たといこの語無しでアメリカ英語は十分旨くやってきたにしても，イギリス英語の場合にはこの語があったがためにこれ迄は可能であった区別，即ちここでフォスターの引用例文を掲げれば，“Last year I spent a fortnight（連続の2週間）at London.”と“Last year I spent two weeks（i. e. two separate weeks 間をおいた2週間）at London.”との間の区別を曖昧なものにしてしまうであろうとフォスター自身も懸念している（p. 336）。然しこれに似た現象は他の語の場合にもある。例えばイギリス英語では場所を表わす前置詞の‘at’と‘in’とを区別して用いているが，アメリカ英語では広さの大小に関係なく常に‘in’を用いていながら結構旨くやっていることは注目に値しよう。

述べてきたように，語彙と語法とは屢々アメリカ英語から全く無意識的に借用される。意識して借用された場合でも，それが大西洋横断の起原（trans-atlantic provenience）のものであるという事実は間もなく忘れ去られる。H. W. Horwill（下出）は，彼が1900年から1905年に至る間合衆国に住んでいた期間中に書き記しておいた多数のアメリカ特有語彙も，若し彼が単に自分の記憶能力だけを信じて，書き留めることをしておかなかったとしたら，1935年にはそれらがアメリカ起原のものだということを認めなかったであろうと証言している。何故ならば今日という日にアメリカだけで用いられている語法も明日になると，屢々それ等が大西洋横断起原の語であるという意識は全くなしに英国の著述家談話者によって採り用いられてしまうからである（H. W. Horwill: A Dictionary of Modern American Usage, Oxford, 1935, Preface）。彼は「賃金引下げ」（‘reduction’）の意味での‘cut’をアメリカ特有の語として挙げているが，この用法での‘cut’は英国では1931年の経済危期に広く用いられた。そして1935年に至る迄にはそれがアメリカ起原だという意識は全く無くなっていた。それは一時は書く場合には引用符に包んで用いられていたが，全く英国の風土になじんでしまった。

第8章　米英における語彙選択のちがい

(Natipnal Difference in Word Choice)

‘automobile’という語彙は，イギリス英語の‘car’や‘motor car’

に対するアメリカ的同意語として多くの語彙集は掲げているが，実際には，それはアメリカでは1つの公式用語であって，通常用いられているのはイギリス語彙と思われている 'car' という語である。ところがアメリカ語だと思われている 'automobile' が英国の2つの自動車ドライヴ連盟の名前，即ち「英国自動車ドライヴクラブ」('the Royal Automobile Club') と，「自動車協会」('the Automobile Association') に用いられている。またアメリカで完全な迄によく知られ屢々用いられている多数の語法が，イギリス語法として掲げられている。たとえばアメリカ用語だとされている 'mailman' や 'letter carrier' や 'railroad' がアメリカ談話の中では，より屢々聞かれることは事実ではあるが，イギリス用語だと言われる 'postman' や 'railway' という用語も，ヂェムズ・エム・ケイン (James M. Cain, 1892- ，米国の新聞記者) が書いた極めてアメリカ的探偵小説の名前として 'The Postman Always Rings Twice' (1934) のように用いているし，アメリカの鉄道で 'Railway Express' (急行列車) や the 'Southern Railway' (南部線) というように用いている。同様に 'baggage' はアメリカで，luggage は英国で用いられると書かれていることが多いが，然し現実は 'luggage' もアメリカで極めて普通に用いられるようになっている。Mencken は (男子用)下着 'drawers' (ズロース) をイギリス用語の 'pants' に代るアメリカ語として彼の語彙集('Supplement One, the American Language' 1962, p. 467) に入れているが，1936年 (彼の著作の第4輯の出た年) においてさえ，この語が確かにそうであったかどうかは疑がわしい。'drawers' は今日ではアメリカで男女何れの下着を指すにせよ，この語は既に古語化して (archaic) しまっていると確信を以て言える。アメリカ人はこの語の長たらしさを嫌って，その代りに 'shorts' を採用した。そして同時に 'shorts' という語で下着ばかりでなく外に着る衣服をも指して使用している。下着を言う 'pants' は圧倒的に婦人物を指すに至っている。そしてその縮約形の 'panties' が極めて普通の通用語となっている。どうかと思う人は男物衣料品店・婦人子供用肌着類を売っている店へ行ってみるがよいであろう。

米英両語を対比させて限りなく載せている大胆な語彙集は何れも次のようなものも掲げている。 mad（米）—angry（英）；同様に，sick—ill;（動名詞の主語として）visitor—visitor's; letter-box—pillar-box; package—parcel；stairway（階段）—staircase；window-shade—blind; filling-station—garage 等々。

〔注〕これらの語彙集の多くは眺めてみると，アメリカ用語群だとして掲げている頁の上に，多数の完全なまでに十分に理解されている言い回し，そしてその多くはイギリスにおいて通用している言い回しでもある用語が載せられている。

アメリカで行なわれている談話の研究観察者であるランドルフ・クヮーク（Randolph Quirk）は，1956年12月2日号のニューヨーク・タイムズ週刊評論（New York 'Times' Weekly Review）の国際版（p. 7）で，この問題を取扱い次のように述べている。「語彙集の中に，これこれははっきりイギリス的な用語であり，これこれはアメリカ的な語法であるとして区別して掲げられている長いそしていかめしい明細表は，その75%のものは，読者を誤らせるものである。調べてみると，非常に手際よくイギリス英語，アメリカ英語として区別されている語の両方ともがイギリスまたはアメリカの何れか一方の国で用いられているということが判明するし，また両語ともが両方の国で用いられていて，ただその用い方が，国のちがいでそれぞれ少しちがった文脈の中で，或いは少しちがった適用の巾を以て用いられているに過ぎないということが判明する」と。

アメリカ人とイギリス人という国籍のちがいで用語の選択・用語の好みが，上表が示すように実際にちがっているかどうかその辺の模様を眺めてみることにしよう。

先づ madと angry について言えば，アメリカ人は mad だけしか用いないというのではなく，angry は公式文書の中で用い，その他の場合には mad を用いる。これに対しイギリス人も angry だけしか用いないというのでなく，両語を，しかも，同じ意味で多数のイギリス人が用いている。次のものは，両語を，ひとつながりの文章の中で，しかも全く同一

の意味に用いた著るしい例である。それは高い知識を持った E. C. Lorac という名の英国人作家によって書かれた探偵小説 'Speak Justly of the Dead'(「死人のことは公平に話せ」, Garden City, N. Y. 1953) からの一節である。"It's no use getting angry, Venner. I know you feel mad with me..." (p. 115), 《医者の言葉》(「ヴェナさん, 腹を立てても無駄です。あなたがわたしに腹を立てていることは分ってますが…」)。

〔注〕 mad を angry (怒れる) と同意味に用いるこの用法はもっと古い時代の英語即ち欽定訳聖書 (Authorized Version, 1611) の用法でもあった。"...being exceedingly mad against them, I persuaded them even unto strange cities" (「…わたしは極度に怒れてきたので迫害の手を無関係の町々に迄及ぼした」)。

sick という語は英国では 'nauseated' 〔nɔ́:sièitid〕 (吐き気を催おす) の意味しか持たないと思われているが, もっと古い時代の英国で, 今日アメリカ的用法だと思われている ill (病気の) の意味で用いられたし, また今日でもその意味で用いられている。

以上のことは語彙や言い回しの選び方に米英で完全にちがっている例は大して多くはないということを言わんとしているのではない。それ等の用例の大部分のものは大西洋の両側で不注意に用いられても重大な混乱を引き起すものではない, ということを言いたいのである。然し矢張りよく調べてみると, ちがいはある。というのは語や言い回しの選択は, 大西洋を隔ててそれぞれ反対側にあるという位置の相異ばかりでなく, 同一の側の内部に行なわれている言語的実例は, 単に年齢や・社会的地位・審美的先入主的好みという側面だけからでも, 語や言い回しの選択はちがってくるからである。'filling station' (自動車のガソリン給油所) という語法はアメリカ起原のものであるが, 同様にアメリカで用いられている 'garage' と完全に同じものを意味する訳ではないが次第に garage を駆逐しつつあると言える。英国においても, 年配のドライヴァーは 'garage' を用い, 若い者は意味内容が明らかであるという理由から 'filling station' を用いるようである。面白い出来事が, 若さと老年 ('youth and age') のちが

いが果す重要な役割を示している。或るドイツ婦人がドイツ語の 'Tankstelle'（油槽所）に当るイギリス英語を尋ねた時，英国人ドイツ語教授は 'garage' と答えたその瞬間殆んど同時的に，彼の助手は 'filling station' と言い添えたという。

アメリカ人は 'perambulator'〔pərǽmbjuleitə〕（うば車，略して pram〔prem〕）のことを指すにイギリス用語の 'pram' を用いないで，'baby carriage' と言うし，（演劇・テレビの余興番組などの）司会者のことを指すのに英国人の用いる 'compère'〔kɔ́mpɛə〕（もとフランス語，命名親）とは言わないで，'M. C.' または 'emcee'〔emsíː〕（Master of Ceremonies の略）と言う。

次に掲げる初めのものはアメリカ人の好む用語，後のものはイギリス人の好む用語と思える。insane（気狂いじみた）—mental; gas（-oline）—petrol; truck—lorry; bus（都市と都市の間を結ぶ）—coach（但し英国で bus というのは市または町内の1地区から他の地区への短距離輸送用）; molasses〔məlǽsiz〕（糖蜜《ポルトガル語＜ラテン語の honey》）—treacle〔tríːkl〕; second floor（または second story）—first floor（または second storey）; intermission（《演劇の》幕合い）—interval; orchestra seat（《舞台前の》平土間一等席）—seat in the stalls; a trillion（一兆）—a billion; a raise（昇給）—a rise。そしてアメリカ人の多くはアメリカ用語に対するイギリス用語を十分に心得ている。然し次のようなことがあるのはアメリカに取って不幸である。アメリカ人で，ヨーロッパの観光に訪れる者の中に，アメリカの小さい町の金持ち有力者達（magnificas,《昔の》ベニス共和国の貴族・大立て物）の心なき振舞いによってアメリカ全体に対する悪評を国外に引起す者がある。彼等はヒゲをキチンと剃り，ダイヤモンドを指先にちりばめ，ごてごてした衣服を身に纏い，大名旅行（grand tour）をし，旅先の水道鉛管工事を大声でブツブツ言い，彼等の乗った観光バスがロンドンのトラファルガー広場を通る時，「一体このネルスンというのはどうゆう男だったのか」（"Just who in heck（《俗語》地獄 hell）was this Nelson?"）のような質問を発す

る社会の中堅 (salt of the earth) と自負する人間どもである。彼等がアメリカ文化の代表者である訳ではないであろう。

確かに，普通のアメリカ人が，「一つの踏み台に乗って，白い上衣を着た技術者が一台の saloon のbonnet の中へと腰を曲げて，エンヂンのほこりをボロ布で拭いていた」"On one stand, a white-coated mechanic was leaning into the bonnet of a saloon carefully dusting the engine with a piece of rag." (1959年10月9日号スペクテイター誌 p. 496) というひと文句を即座に理解出来なかったという理由で，南部の粗野な山男であるかのように非難されるとすればそれは不当なあしらいである。アメリカでは sedan (運転手を仕切らない普通の箱型自動車) と言い，hood (自動車の機関部のおおい) と言うからである。また geyserが屢々聞くように〔gíːzər〕と発音された "an old geyser in the bath"という文句が「浴場の中にいるひょうきんな紳士」という意味でなくて，「浴場内の1箇の古びたガス湯わかし器」のことだと理解しなかったとしても大した罪ではない。gayser はアメリカ音では〔gáizər〕，イギリス音では〔gíːzə〕であるからである。然し教育を受けたアメリカ人の多くは 'clerk' という語のイギリス用法では，若しその clerk が弁護士の書記か牧師の書記を指しているのでなければ商店の簿記係を指している事位のことは知っているし，多数のアメリカ人は自分達の母国である英国について十分な知識と関心を持っているので，語の用法が両国でちがっていることが既に十分知られている語法の場合に，イギリスの友人が骨折って説明してくれるようなことがあると，アメリカ人は自分達の知性が中傷を受けていると感ずることもありそうである。

アメリカでは「ズボンの折返し」を 'cuffs' と呼び，英国では 'turn-ups' と言う。英国人が「《男子の》略式夜会服」を 'dinner coat' または tuxedo〔tʌ́ksidou〕と言い，アメリカ人は 'dinner jacket' と言うかまたは英国人と同じように 'tuxedo' (口語では 'tux') と言う。(アメリカの男子服専門店では夏期に着用する白い上衣だけを 'dinner coat' と言い，そのような商用語としては伝統的な黒色の略式夜会服のことを 'tux-

edo' と呼んでいる)。「ズボン吊り」はアメリカで時に広告面に 'braces' と出ることがあるが，実際は 'suspenders' を用いる。'suspenders' という語は，もとはイギリス英語で「ズボン吊り」を指していたが，英国では婦人用靴下や男子用の短かい靴下吊りのゴムバンドに迄適用を拡大した（その最初の実例は OED では1895年からとある)。この語は今日では婦人用ゴムバンドにしか用いられない。丁度 'garters'（靴下止め）という語がアメリカで婦人用にしか用いられないように（というのは今日では男子用靴下は頂上にゴムバンドが入っているから）。同様に流行の移り変りで，膝下までくるアメリカ用語の 'boot'（《膝下までくる》長靴）とイギリス英語の 'boot'（《足首の一寸上までくる》半靴，これをアメリカでは 'high(-topped) shoe' と言う）との間の使用上の区別は殆んど消滅した。アメリカでも足首の弱い老紳士か或いは屋外を歩き回る必要のある人々だけが，イギリス英語の boots を穿いているだけで，両国人とも区別なく 'shoes' を穿いている。元来アメリカでは古くから「膝下までの長靴」と足首の一寸上までの半靴」との間の命名上の区別をせずに 'shoes' をその用語としていた。奇妙なことに 'shoes' は "boot-shop" という名の店で売られている。

以上に掲げた用語以外の用語の場合には今日なお有効な用法上の区別が残っている。と言っても日常の談話 (everyday speech) の中ではそのような語は数も減っているし，ちがいの重要度も次第に薄らぎつつあるのが現実である。挙げてみれば人のよく知っている（米）pitcher—（英）jug 間のちがいはまだ続いてはいる。アメリカ人がクリーム・ミルク・サイダー等を容れる器を 'pitcher' と呼ぶが，それに対する英国用語は 'jug' である。英国で 'pitcher' という容器は jug より可成り大型の容器で丁度リベカ (Rebecca《聖書》, Jacob の母) が井戸端へ運んで行って水を汲んで来た器に似た容れものを指す。アメリカ人にとっては jug というのは英国人が言う jug よりも幾分か大きく，首の所が細くなっているので呑口も注ぎ口も付いていない器である。英国人には 'spool' というのは針金またはタイプライターリボン，またはフィルムの巻いたものであり，綿糸

その他の糸を巻いたものは 'reel' である。アメリカ人の用いる 'trailer' (自動車で引く「移動式住宅」) は英国では 'caravan' と呼び，アメリカ人の prep (-aratory) school (大学進学コース《私立》学校) は英国では 'public school' と言い，逆にアメリカで public school と言うのは英国で 'council school' (初等中等の公立学校・州立学校) と称するものである。アメリカで 'installment buying' (分割払式購入法) は英国では 'hire purchase'，アメリカでの 'chain stores' (連鎖店) は英国では通常 'multiple stores' (または-shops) と言い，アメリカで「ゴム底のズック靴」を指すに用いる 'sneakers' (pl.) は英国では 'plim-solls' (時に 'Plim-solls') と言う。

第9章　アメリカ英語とイギリス英語における統語法と語形態上のちがい

(Syntactical and Morphological differences)

アメリカ英語とイギリス英語の間における統語上または語の形態的ちがいは，丁度両英語の語彙の選択のちがいがそうであったように，大して大きいものではない。

集合名詞に例をとれば，英国人は米国人に比べて，複数動詞を用いる傾向があり，"the public are..." (大衆は…である) と言う。1956年6月16日のロンドン・イヴニング・ニューズ紙の p. 10 を一寸のぞいただけでも例が幾つかある。"England Await Chance to Mop Up" (「イングランドは掃討の機をうかがっている」) (英国クリケットチームが更にオーストラリヤチームと対戦した事についての記事の見出し文句)；"Wimbledon Are Fancied for Double" (「ウィムブルトンテニスコートで複試合が行なわれると予定されている」) (Wimbledon はロンドン郊外にあって毎年国際庭球選手権試合が行なわれるところ)；"Middlesex were in a strong position" (「ミデゥルセック州チームは優勢な立場にあった」)。これらの文のアメリカ的統語法では，主語が単数形態であるため動詞は当

然に単数を必要とする。イギリス英語ではスポーツ欄以外のペーヂでも，"The village are vivid."（「村は活気を帯びている」）；"The U. S. Government are belied to favour..."（「合衆国政府は…に賛成である」）；"Eaton Colledge break up for the summer holidays to-day ...."（「イーテゥン大学は本日を以て夏期休暇に入る」）；"... but the Savoy have their own water supply..."（「然しサヴォイホテルには自家給水施設がある」）のように複数扱いである。ロンドンのスペクテイター誌もその1960年2月26日版 p. 30 というほんの1頁の中だけにも，"The Government regard...."（「政府は…と見做している」）とか，"Scotland Yard are..."（「ロンドン警視庁は…である」）のような複数動詞の例が多い。

次のような言い回しは英国の現代作家の作品からのものであるが，アメリカの作家なら括弧の中に示したような表現を用いたであろう。"Thus Mgr.〔Monsignor〕Knox is faced by a word, which, if translated by its English equivalent, will give a meaning possibly very different to〔from, than〕its sense."（「こうゆう訳でノックス大僧正は，若し英語の同意語を用いて翻訳されるとすれば，恐らくその用語の意味とは随分ちがった意味を表わすであろう，用語に直面しているであろう」）。O.E.D.辞典は，'different to' はイギリス英語で古くから完全に確立している慣用語法であると認めているし，ファウラー（H. W. Fowler, 1858-1933, 英国の辞書編輯家）は彼の A Dictionary of Modern English Usage, Oxford. 1926 の中で，この語法を是認して，この語法に反対する意見を 'mere pedantries'（単なる衒学）に過ぎないときめつけている。英国で 'different to' が濫用語法のそしりを一部から受けたのと同じく，'different than' はアメリカで批判の的となっている語法ではあるが，既に十分に確立した語法である。ファウラーは上掲の彼の辞典の中で，'different from' について，このイギリス的慣用語法は誤っているどころか，'different to' よりももっと普通な言い回しであると言い添えている。この 'different to' に関してはO. E. D. も Goldsmith (1728

—1774) や Cardinal Newman (1801—1890) からの引用を掲げているし, Coleridge (1772—1834) , Southy (1774—1843) , De Quincey (1785—1859) , Carlyle (1795—1881) , Thackeray (1811—1863) その他の英国作家の作品の中に用いられていると述べている。

米英においてそれぞれ異って用いられている別な統語法を掲げよう。"She'd got〔she had〕plenty of reason... for supposing that she would count in her father's will," (Ronald Knox) (「彼女が父の遺言を勘定に入れることになろうと考えたことには十分な理由があった」)。"She hadn't got〔didn't have〕any relatives... except a sister ... in Canada or somewhere." (Macdonald Hastings) (「彼女はカナダにもどこにも, 一人の妹のほかには縁故者がなかった」)。"You don't think... that he did confide in any person? — Unlikely. I think he would have done〔would have〕if Galbraith alone had been involved." (Edmund Crispin) (「彼はどんな人の言うことも信ずる男だったとは君は思わないと言うのかね！—そんなことはないよ！もしガルブレイス一人だけに話しをかぎるなら, 信じたろうよ」)。"I'll tell it you"〔to you.〕(Philip MacDonald). "Are you quite sure you could not give it me〔give it to me, give me it〕yourself?" (Josephine Bell) (「自分の手からはわたしに渡せなかったということ本当かね」)。"In the morning, I was woken〔waked〕up at eight by a house maid." (Nancy Mitford)。

上に掲げたイギリス語法は, アメリカ英語では聞かれないが, 角括弧内に示した対等アメリカ語法は, 今日ではイギリス英語語法の変形として普通である。また 'different than' のアメリカ語法は少くとも今日迄のところは普通な語法であった。

'different to' 以外にも前置詞の選択に米・英で異った語法を持つものがある。例えば英国では The householder lives 'in' a street. (その家の主人は通りに面した家に住んでいる)と言い, アメリカでは... lives 'on' a street と言う。英国では常連客に対しては「仕出し屋業務を行な

っている」を ‘cater for’ と言い，アメリカでは ‘cater to’ と言う。同様に米英で異る前置詞を用いる幾つかの語法がある。

前置詞の使用に関して言えば，過剰と思える前置詞を，最近になってアメリカ英語ばかりでなく，イギリス英語にも用いる傾向がある。イギリスにおけるこの傾向はアメリカ語法の刺戟を受けたものであろうと思われるが，然しこの語法はイギリス英語にとって新語法ではなく，アメリカ起原のものでもない。英国で復活し始めたこの前置詞添加の冗長な語法について，1967年に Chelsea（テムズ川畔の町）の Conesford 第一男爵の Henry George Strauss がロンドン作家クラブで行なった演説で，アメリカ語法の「見えっぱりの無教養」（“pretentious illiteracy”）ときめつけて攻撃した。とは言えコーンズフォド男爵の目に冗長と映った過剰前置詞使用法は実際は随分古い時代に始まっていたもので，スカンヂナビア諸語，ドイツ語，英語などゲルマン諸語に内在していた特色の1つで，偶々それがアメリカ英語において時々興奮的状態で顔を出したもののように思える。例えばアメリカ英語では，‘to visit someone’（人を訪問する）では物足りなくて ‘visit with’ them と表現する必要があると感じられた。アメリカ人は何かに ‘refer to’「言及する」）時に ‘refer back to’ と言い，また何かの委員会を ‘head a committee’（「司会する」）する時には ‘head a committee up’ と表現した。‘continue’（「...し続ける」）という意味では益々印象的である ‘continue on’ をアメリカ人は好んだ。「何かをする計画を立てる」と言う時にはアメリカ人は単に ‘plan doing something or other’ では物足りなく感じて，“plan on doing...”と言う。「契約破棄」はアメリカ人にとっては ‘cancelling’ でなくて，‘cancel out’ である。単に ‘check’（「照合する」）はアメリカ人では ‘check up on’ となり，古くは ‘to face it’（「それに直面する」）で十分だと思われていたものが，アメリカでは ‘face up to something’ というように，過剰前置詞による細胞増殖（proliferation of redundant prepositions）が行なわれる。

第10章　慣用語法における米英のちがい

(National Differences in Idiom)

標準イギリス英語の場合に存在する身分階級 (caste) のちがいによる集団的言語というものがアメリカには無いという理由で，言語に対するアメリカ人の態度は，文中で占める語の位置に気を配る傾向がある。例えば 'only' という語に関して言えば，only の本来の位置と思われるところのものに基礎を置いた文法上の「正確さ」('correctness') ということに重要さを置くが，英国人はそれが総ての人々の目に多かれ少なかれ自然の位置だと思われる文中の位置即ち動詞の前 (before the verb) に位置させる傾向がある。然し英国人は 'only' という副詞の「非論理的 ("illogical") な，しかし慣用語法的な「動詞の前の位置」(preverbal position) に対しては，アメリカ人よりも，もっと寛大な態度を持っている。屢々偏屈とまで言える H. W. Fowler (前出) でさえも，彼の 'Modern English Usage (1926) の中で「文章の明快度が危殆に頻しない限り」("when perspicuity is not in danger"), only のとるべき位置については「不便な制限条理に従がう必要はない」("it is needless to submit to an inconvenient restriction") という極めて常識的な意見を抱いていた。けれども教育のあるアメリカの話者達，いやもっと詳しく言えばアメリカの作家達，更に厳密に言えばアメリカの教師達や書物の編集者達は，英国人でこれらの職業に従事している人達よりも，もっともっと only の位置に心を遣っていることは事実である。

文中で only の位置設定に関して，そのようであるとすれば，文中での 'whom' の置き場所は，とてつもなく重要な問題となってくる。それは，よい文法 (good grammar) と見做されている文法ルールが，whom を呼び込むところの位置に必ずそれを置くということである。アメリカ人にとっては，そうすることが道義的義務 (moral obligation) だとも言えるであろう。

この点で英国女王エリザベス2世 (1926—　) が，1957年に新聞社主催による女王歓迎晩餐会の席で記者達に向ってなされた女王の質問の言葉

"Who are you with?"（1957年10月28日号の週刊誌タイム；What newspaper do you work for?《あなたは何新聞で働いていますか》の意）は，アメリカにおける最高級の教育ある人々の社会では，語法の検閲を恐らく合格しないであろう。

'who' を無差別に，目的格として用いた英国の著名作家達の用例を，ヂョーヂ・ハーリー・マクナイト（George Harley Mac-Knight, 1871—?，米国オハイオ州大学英語学教授）は，その著「形成途上の現代英語」("Modern English in the Making", 1928) の中に例示して，Steele (1672-1729), Smollett (1721-71), Lamb (1775-1834), Jane Austen (1775-1817), Sheila Kaye-Smith (1887-1956), Rose Macaulay (1881-1958), James Stephens (1882-1950), Joseph Conrad (1857-1924), Laurence Housman (1865-1959), George Meredith (1828-1909), Rudyard Kipling (1865-1936) その他から引用している（pp. 531-32)。McKnight はこのように目的格に 'who' を英国で著名な作家が書かれる英語（written English）で用いることを非難している訳であるが，アメリカでも実は，談話の中や対話の中では，動詞や前置詞の目的語として屢々用いられ，またそれが文頭または節の初めに来る場合が多い。但しアメリカでは公式英語の文書の中では正しく whom が使われる。公式文書ではないかも知れないが，合衆国の第32代大統領のエフ・ディー・ルーザベルト（Franklin Dellano Roosevelt, 1882-1945）が，下院議員の発言者に宛てて書いた手紙の中で，"I don't care who you tell this to."（このことを誰に話しても構わないよ）と述べたのは「よい文法」には合致しないであろう。

また許可（permission）を乞うたり与えたりするのに 'can' を避けることもアメリカでは重要な事柄となっている。アメリカ英語でも，イギリス英語と同様に，公式な標準アメリカ英語では can は能力（ability）または力（power）を表わし，'may' は可能性（possibility）または許可（permission）を表わすからである。ただ談話（speech）のアメリカ英語では，この許可を表わすのに can が実際上は用いられている。例え

ば "Mother dear, can I go out to swim?" (「ママ, あたい, 今日泳ぎに行っていい？」) —"Yes, my darling daughter, you can. (「えゝ, いいよ」)。子供達は通常否定疑問の形で許可を乞う時にもまた can を用いて, "Can't I go to the movies tonight?" と言う。これらの例は, 逆に, 許可を表わすには, 公式の文書に用いられるアメリカ英語では「よい文法」に合わせて殆んど例外なしに may が用いられていることを示している。

ここで話しを一寸英国に移して眺めてみよう。ケンブリッヂのフィシャー大学の副総長のエス・アール・チェリンテッン (Sir Richard Cherrington) が彼の一友人に宛てて書いた覚え書きの中の, "Babs, dear, can I see you for a few moments, please?" の一文句は, アメリカの大学の試験審査委員会の審査を合格しないであろうし, またチェリンテッンのこの文句をディルウィン・リース (Dilwyn Rees, ケンブリッヂ・セントヂョンズ大学の評議員) が, 彼の「ケンブリッヂの殺人」('The Cambridge Murders', London, 1952) の中に引用したのは, 彼もまた審査不合格となることも明らかである。殊に Sir Richard 教授は "prevent him getting back next term" (「来学期は彼を学校へ戻らないようにさせる」) (p. 11) とか, "Who are you going to shoot?" (「誰の写真を撮ろうとしているのか」) (p. 15) のような言い回しを使っていることは, たといそれが Richard 流の英語であるにせよ, アメリカの大学審査委員会の試験合格は殆んど見込みはないと言えよう。

また 'like' を接続詞として用いることを避けることも重要な事項となっている。この慣用語法は16世紀初期以来自己満足的な教育あるイギリス英語でも普通になっている(O. E. D. 辞典の中でも, like, a., prep., adv., conj. (colloq.), n., & v. とある)。この点でクライヴ・バーンズ(Clive Barnes) が1960年7月1日号のスペクティター誌(p. 21)に, "The Russians dance like the Italians sing and the Spaniards fight bulls." (「イタリヤ人が歌いスペイン人が雄牛と闘かうように, ロシヤ人は踊る」) という章句を載せている。like は接続詞として長い歴史を持っている。それ

は Shakespeare (1564-1616) や Keats (1795-1821) にも，それから the Bible にさえ，"Like as a father pitieth his children, so the Lord pitieth them that fear him" (Psalms, 103:13)（「父がその子らを憐れむごとく父なる神は神を畏れる子らを憐れみ給う」）とある（但し聖書のここでは like と as は結び付けて表われているが，それ以後 as は脱落して like のみが残った）。然し最近になっては，この用法は世論から無言の追放を受けている。例えばジェームズ・サーバー (James Thurber, 1894-1961, アメリカの著述家) が書いた劇 "Three by Thurber" に対するウォルコット・ギブズ (Wolcott Gibbs) の批評論は，1955年3月19日号の週刊誌 New Yorker の p. 66 で，「サーバーの原作を学校教科書用にするために改作者達に原文の修正を行なわせねばならなかった。実は 'like' を接続詞として用いることについては前から何回となく反対意見を出してあったのに」と述べている。現実の情況は，接続詞としての like は正式の文書の英語の中では滅多に用いられないが，然し話される英語や書かれた英語でもそれが会話の英語である場合には用いられている。現代用法では，大学教授・弁護士・僧侶・ラヂオテレビ解説者達，そして新聞記者も like をこの統語法で用いている。"like I say (said)"（「私が言ったように」）とか "like I told you" のような表現は談話では普通であり，"Like I said, they won't find a clue"（「私が言ったように彼等は手がかりが見付からんだろう」とか，"Like I told you, it is difficult to do"（「私が言ってあるように，それは仲々むつかしいことだよ」）などはその一例に過ぎない。

人称代名詞を用いる場合，その正しい格 (case) であると思われる格と厳密に一致する語形を選び用いることも重要な問題となってくる。この問題に関して，1958年2月22日号のサタディ・リビュー誌 (the Saturday Review, 1924年創刊アメリカの週刊書評雑誌) の中で，レイ・レッドマン (Ben Ray Redman, 1896-1961, アメリカの新聞記者・著述家) は，スノウ (C. P. Sir Charles Snow, 1905- ，英国の著述家，Cambridge 大学寮長) が書いた「金持ちの良心」('The Conscience of the Rich')

を悪評した一文を載せて，「Sir Charles 寮長は，誤用された代名詞を英国の最も有名な国外輸出語法とする方向に応分の奉仕以上のことを行なっている」と述べている。レッドマンはこの言語的罪悪だと言われる語法の例を続けて挙げている。"No one had eyes and thought for anyone but he as he got slowly to his feet."(Edgar Lustgarten, 'Defender's Triumph', 「防衛者の勝利」, London, 1957, p. 108) (「彼がゆっくり立上った時総ての人の目と心が彼の方に向けられた」)。"...respectable people like you and I..." (Sir Winston Churchill, 1874-1965, 英国宰相・著述家; 1957年11日号タイム誌)。また"...it would not be right for either you or I to be where we planned to be on D-Day" (英国皇帝ヂョージ4世の言葉; 1951年10月29日号 Life 誌 p. 83; チャーチルの戦争覚え書きから引用《D-Day とは，1944年6月6日第2次大戦攻撃開始日》) (「我々が行こうと計画した場所へ攻撃開始日に行くことは，あなたもわたしも正しくはないでしょう」)。また"...a good deal older than me" (Somerset Maugham《1874-1965, 英国の小説家・劇作家》の 'The Vagrant Mood' の中の言葉を，1952年1月5日号 ニューヨーク Herald Tribune誌の Book Revew欄 p. 5 に，同誌の評論担当者が非難の意味で原文のまま引用したもの)。また，"...I imagined... that there was only one 'you' in the world and that was me" (Graham Greene《1904- ，英国の作家，映画批評家》が書いた小説 'The End of the Affair'《「事件の終末」》New York, 1955, p. 12 の女主人公 Sarah の言葉)。

eveyone, everybody, someone, somebody, no one や nobody という代名詞に言及する時，人称代名詞の単数形の he, she, it や，それらの所有格・目的格と共に用いることも重要な問題となる。例えば次のものは標準イギリス英語としては文法違反であろう。"Everybody seemed to be particularly on their best front parlour behaviour." (テレビ・ゲスト批評家 Stephen Potter の用いた表現，ロンドン Evening Standard 紙1956年6月5日号 p. 6) (「総ての人が特に気を付けて客間用

の行儀作法を心得ているように思えた」)。"No one, when they saw her, could believe..." (William Roughead〔r'ʌfhed〕の書いた'To Meet Madeleine Smith'《1943年再版》の中に出ている)。"Everyone felt uncomfortable and fidgeted in their chairs." (C. S. Forester《1899-1966, 英国の作家》がその小説 'Plain Murder' の中で使った表現, 1951年 London 版 p. 127) (「誰もが自分達のイスの中で居心地が悪く落着かなかった」)。

McKnight (前出) 著の 'Modern English in the Making' は, このような「語法違反・破格」("solecism") の実例のもっと多くを, Jane Austen, James Stephens, Thomas De Quincy (1785-1859), Lord Dunsany (1878-1957), Cardinal Newman (1801-90), Samuel Butler (1835-1909), George Moore (1852-1933) から集めており, もっと古い時代の実例をも添えている (pp. 528-29)。

「長期に亘る伝統に依ってではなく, 一時的流行の使用法によって慣用語法となった」構文に関しては, McKnight は「'his' や 'her' の二重代名詞を用いる (これはアメリカ英語において屢々出合う構文であるが) ことのギコチない語法の必要性は, 'their' の「誤用」(misuse) に依って未然に防止される」と決論付けている。二重代名詞使用のような長たらしい記述を避けるためには, 自分の言葉に自信の持てない気の弱い人間どものために計画された可成り簡単な文法規則と申し合わせ操作法の全量セットを守ること, 即ち確信を持って話す人間どもが, 大して気にも留めていない語法上の守るべき掟 (おきて) や, その禁止条目を守ることが重要な問題となってくる。

上に列挙した諸例は, 謂わば個人の慣用例綴り込み帳から, 極めて手当り次第に採ってみたものであるが, アイゼンハウア将軍 (General Eisenhower, 1890-1969, 米国第34代大統領)の用いた "to welcome Mrs. Eisenhower and I" のようなアメリカ英語の実例を印刷された資料の中に探し求めることは英国人の使った実例探しよりもっと困難な仕事である。これは将軍が勿論即席にマイクに向けて喋った言葉に過ぎないが, 公

式の演説であったらこのような構文は起らなかったであろう。何故ならばアメリカの指導者達による演説は今日では何時でも事前に十分な注意を以て編輯されるからである(そのような演説は先づ最初に "ghost writers" 《「演説・文学作品等の代作者」》によって書かれることがあると言われる)。何はともあれアイゼンハウアの言葉のように 'and' の後に目的格の形で 'I' を用いることはアメリカ英語では珍らしいことではないが，将軍のこの構文がテレビを通じて流れた時には，「英語よ何処へ行くのか」("What-is-the-English-language-coming-to?") 式の手紙の洪水がアメリカ全国の新聞の読者やテレビ視聴者達から編輯者宛に送り込まれた。そして疑いもなくそれに対して編輯者としてのコメントもなされたに違いない。"my wife" の代りに 'Mrs. Eisenhower' を用いた「ノンユー式語法」('non-U' use (<non-upper class; 上流階級にふさわしくないと考えられるある種の言い回し) は，エリザベス2世が彼女の夫を指して簡単に 'my husband' とずばり言ってのけたというのに対比して，不賛成の論議を呼ぶに値しよう。

このような慣用語法がアメリカで活字となっている実例が割りに少ないということは，或る程度までアメリカの出版業者がそのような細かいことに，英国の業者に比較して一層大きな注意を払っていることに依るかも知れない。このことが，ひいては「印刷された英語」(edited English) 即ち作家を渡世とする人々の実際上の慣用語法を必ずしも詳細には反映していないであろう一種の言語形態として知られるところのものを生むに至った。それは一種の職業上の流儀を持つ語法である。アメリカの作家は大抵は，教養人の慣用語法の特色であると思われている機械的とまで言える正確さを広く心得ているがために，標準的アメリカ語法として規定されている談話の形態を習慣的に使用する。そしてアメリカの作家の用いる慣用語法は，イギリスで活字となった各種作品からの引用例が示している形態の慣用語法とは異ったものとなっている。

第11章　標準イギリス英語における純粋主義

(British Purism)

前章で示した英国人の慣用語法が標準イギリス英語に何時でも起る語法であると判定されてはならない。それらは標準イギリス英語の框内で事実として起ったということである。英国には数多くの「《用語の》潔白主義者」('purists') がおり，所謂「慣用」('rules') というものは，そうゆう人間どもの間で発生するものである。英国以外の場所にも潔白主義者・純粋主義者は少なくない。とりわけ言語に対する純粋主義的態度というものは人の気質の問題でもある。そして言語の純粋主義者の総てが学者である訳ではない。彼等は屢々自分が偶々特別に詳しく知っている寧ろ悪語法のような構文に関してのみ「潔白」('pure') を主張し勝ちなものであり，彼等にとっては「分離不定詞」('split infinitives'), "different to's", 「終末前置詞」('terminal preposition') などは我が意を得た慣用語法であるが，他方において，これらの慣用語法が誠に気紛れな語法でしかないのと同じ位に気紛れな他の慣用的悪語法に対しては彼等は何の関心も持たない連中である，と言えよう。主として18世紀の英国に生きた規範文法の主張者達が，ロンドンの cockney 英語を喋る下層民と貴族宮廷人達との中間に位置するもろもろの英国人の間に，「文法」(grammar) とはこうゆうものだという概念を教え込んだ功績は見逃すことは出来ないが，然し最近ではそれらの文法家・純粋主義者も往年の信望を一般社会からは受けていない。ただH. W. Fowler（前出）の場合は，扱い方が小気味よい位に公平な彼の Dictionary of Modern English Usage（1926年初版・1968年修正版）は米英両国において十分な信望は克ち得ている（この辞典は恐らく読者にとって極めて軽妙な読み物となっているためであろう）。言語潔白家達の信望の盛衰は別として，文法家達が整理し，統一し，その普及に貢献した標準的イギリス英語は，今日なお本質的な点では，標準イギリス英語を話す立場の人々だと思われている人々の語法であることに変りはない。

ただこれと併せて次のことは心得ておくことはよいであろう。テムズ川北方の「赤煉瓦造りの大学」("red-brick universities") 出身の多くの「怒れる若者達」によって獲得された新しい語法的特長の出現と共に，「育ちの良い者の語法」("language of well-bred ease") も次第に変化を余儀なくされて行くであろうと思われる。これらの作家グループの多くは，主として標準イギリス英語の持つ発音に対しては，丁度多数のアメリカ人がそれに対して抱いているのと同じような一種の感情的歪み（或る者はそれを良しとし，他の者はそれを悪いとする2つの互に矛盾する感情であるが）を抱いていた。今後或る期間を経た後における標準イギリス英語の進歩の姿を観察することは興味あることである。

アメリカにおいてよく知られている英国の新聞雑誌記者であり文筆家であるカザリン・ホワイトホーン (Katharine Whitehorn) はこの問題を巧みに捕えて次のように述べている。「アメリカ，そこでは人の階級を定めるのは文法 (grammar) であって音の accent ではないから，何人も文法を学んでよい。恐らくボストン市民はこの論法を受け入れないであろうが，然しボストン市民だけが，別のボストン市民を感動させることが出来るであろう」と。

我々は以上で，標準アメリカ英語の立場から，標準イギリス英語との間における語彙のちがい，統語法・語形態のちがいなどを眺めてきたが，然し掲げた実例も極めて少なく，単に概論的に眺めたに過ぎないことをここに言い添えない訳には行かない。最後に言語の観察で最重要極面の一つをなす語・語群・文の持つ米英の音声のちがいを眺める段階に来たと思われるが，章を改めて稿を起すことにしよう。

本稿の結びとして最後に我々は，アメリカ英語学の巨匠H. L. Menckenが彼の The American Language (1918) の第1章 (pp. 4-5) で述べた所論の一部を掲げることによって，アメリカ英語とイギリス英語のちがいに対する両国民の感情と，当然のことではあるが，アメリカ英語に対して浴びせられた罵言の不当性を指摘することによってアメリカ英語の尊厳を示そうとするアメリカ国民の努力の一端を伺がい知る資料としよう。)

A son, however, may become a man, hungry for personal rights and privileges, and when the colonies began to claim the dignity of manhood, even the gentlest prick served to burst the bubble of this assumption of homogeneity which hitherto had been so comfortably accepted on both sides of the water.（けれども，息子というものは一人まえの大人に成長して人間としての権利と特権とを持ちたいと願っても間違いではない。そして植民地が一人まえの大人たるの尊厳を要求し始めた時，それ迄は海を挟んだ両側の国土で何の異論もなく容認されていた言語の同質性の仮想のシャボン玉を軽い指先のひと触りが，パッとはぢけさせてしまう役を果した。）

Instead of fixing attention upon similarities, both British and Americans now began to notice the differences that separated them from each other.（ブリテッン人もアメリカ人も，ともに今や類似点に目を向けることなく，それ迄両者を分離させる役をしていた両言語の相異点に目を注ぎ始めた。）

Both were surprised to find these differences so great, and naturally this same discovery of fact, or supposed fact, led to opposite interpretations in theory.（両国人ともこれらの相異点が意外に大きいことに気付いて驚いた。そして当然のことであるが，現実の事実とそうであろうと思われていた事実のこうした発見こそは，正反対の立場から理論上の解釈法を導き出すに至った。）

The Americans were inclined to see in these differences a mark of their peculiar virtue and claims to consideration, while the Britisher was often moved to look upon them as indications of an unsuspected deterioration and degradation which circumstances had suddenly brought into clear light.（アメリカ人は，これらの相異点の中に，彼等だけが持つ独特の美点のしるしと．熟慮に値する資格とがあることを感じ取ろうとする傾向があった。他方において英本国人はそれらの相異点を，諸般の事情で急に明るみに出てきた明白な言語的堕落と品位低下の徴候であると見做そうとする言語感情に屢々襲われた。）

So far as the language itself is concerned, both of these extreme views were wrong. Colonial English had developed no remarkable gifts or powers, nor had it degenerated from a purer and more perfect type of speech which was only carefully preserved in England.（問題を言語だけに限って言えば，これら二つの極端な見界は両方とも正しくない。植民地（時代のアメリカ）英語は，特筆すべき優れた素質や力を開発するに至ってはいなかったし，またそれは英国の国土においてだけ注意深く保存されたもっと純粋な，もっと完全な談話の形態から変質してもいなかった。）

After the Declaration of Independence, American English remained as it always has been, a closely related but differentiated branch of the English language, connected by the most intimate bonds of tradition with the parent

speech. (独立宣言(1776)以後に至ってアメリカ英語は，伝統の最も緊密なきずなによってその親言語と結び付けられながら，英語という言語の一つの分流として，しかも一方において密接な連繋を保っているが他方において，変形言語たるの特色を持つ分流としての姿を維持していた。そしてその状態は今日も続いている。)

The narrow partisanships which were drawn into consideration of speech arose not from that activity, but from entirely different occasions for an indulgence in emotion of loyal pride or prejudice. (言語を扱う場合の考え方の中に持ち込まれた偏狭な党派根生は，アメリカ英語が行なったそのような言語活動に起因するものではなく，それとは全く無縁のもの，つまり英国人の君主国家的誇り乃至は偏見とも言えるものえの熱情的耽溺にその発生原因を求めることが出来る。)

参 考 文 献

The Language Library: *English Dialects* by G. L. Brook. Andre Deutsch Limited. London, 1965.

A *Dictionary of Modern American Usage.* by H. W. Horwill, Printed in Japan (1958)

Webster's Third New International Dictionary. Springfield, Mass. G. &C. Merriam Co.

Compton's Pictured Encyclopedia. Chicago. F. E. Compton Company, 15 vols.

American English by Albert H. Markwardt. (1958)

Webster's New World Dictionary of the American Language. (1964)

The Origin and Development of the English Language by Thomas Pyles. (1964)

The American Lenguage by H. L. Mencken. University of Florida. (1936)

Supplement I. The American Language by H. L. Mencken (1945)

Supplement II. The American Language by H. L. Mencken (1948)

Current American Usage by Margaret M. Bryant. Funk & Wagnalls. 1962.

The Little Yankee by Alfred D. Schech & R. Kron, 1964.

Iwanami's English-Japanese Dictionary. 昭和44年

The American Heritage Dictionary of the English Language by American Heritage Publishing Co., Inc. 1970.

Shogakukan Random House English-Japanese Dictionary 1973, 1974.

英米文学辞典，研究社 (1961)

英・米発音と綴字の研究，小栗敬三，篠崎書林 (昭和45年)

固有名詞発音辞典，三省堂 (昭和44年)

現代英語学辞典，成美堂 (昭和47年)

Webster's Biographical Dictionary G. & C. Merriam Company. 1972.